新刊紹介

小林文男著『中国現代史の課題』

曽田三郎

まず本書の構成を簡単に示しておくと、第一章「〝四つの現代化〟展開に見る『近代』の再生」、第二章「呉晗批判の虚偽と真実」、第三章「文化大革命下の『階級』と『文化』」、第四章「李泳禧教授の受難」、第五章「歴史における台湾」、附録「中国をみつめた日本人」、となっている。この構成からわかるように、本書は著者のこれまでの幅広い研究活動をうかがわせる。

著者は、事実に即して中国近・現代史の研究を行なうべきことを強調する。第一章では、その事実として、清末以来の中国がいかに執拗に「近代」を追求してきたかを、教育制度の改革、日本やアメリカへの留学生の派遣、そして留学経験を有する人々の国民党や共産党内における指導的役割といったことから論証しようとする。こうした面からの近代中国の把握は、中国における教育制度の変遷に深い関心と研究の蓄積を有する著者ならではのことであろう。

中国における「近代」の追求という事実を正しくとらえず、「反近代」の側面からのみ中国をとらえようとしてきたと、著者はこれまでの研究を批判する。もちろん、著者は、中国近・現代史における個別の事象についてのとらえ方を問題にしているわけではなく、現代中国で「四つの現代化」政策がおしすすめられねばならなかった必然性、そうした発想の根源を問題にしているのである。著者によれば、「四つの現代化」政策は、近代中国が追求し、解放以後も潜在していた「近代」の復活にほかならない。著者の言葉を引用しておこう。「『四つの現代化』政策の実行は、つまるところ『近代の再生』『〝五四〟の再現』といって過言ではない」（本書三五頁）。

中国近・現代史研究についての著者の問題提起は大胆であり、また興味深いものがある。それだけに今後さらに検討を加えねばならない問題点もあるように思う。著者が、一九世紀末以来の中国が追求してきたという「近代」の内容は必ずしも明確ではない。著者の場合、「近代」の内容を、政治や経済の制度によりは、広く人格とか知性といったことにもとめているようである。そこにまた、著者が教育制度の改革や、日本・欧米への留学生の派遣等に「近代」の追求を認める所以があろう。

だがそれにしても、清末官僚による日本への留学生派遣、デューイの教育思想の受容、さらに勤工倹学という形態によるフランスへの留学等を、一様に「近代」の追求としてとらえてよいだろうか。「〝五四〟の再現」と評価した「四つの現代化」政策に、「連続している論理」として、清末官僚の日本への留学生派遣の必要性を説く言葉を引用することには疑問を感じざるを得ない。

著者は、呉晗と親交のあった数少い日本人の一人だという。呉晗はいうまでもなく、文化大革命の発端において批判された、歴史学

者であり北京市副市長という要職にあった人物である。第二章で、著者は文化大革命で批判された歴史劇『海瑞罷官』の書かれた背景、呉晗がその執筆にこめた思いといったことをさぐろうとする。大躍進政策の挫折、自然災害、ソ連の経済援助停止のもたらした経済的打撃、それによる国民生活の圧迫、彭徳懐による毛沢東の政策批判という経済的、政治的状態の中で、皇帝に対して鋭く政治を批判し、自らの所信を述べて罷免されていった明代の官僚海瑞の歴史劇を書くことに、呉晗がいかなる思いをこめていたのか、呉晗が解放区に入ったとき、毛沢東が強い関心を示したという、彼の著作『朱元璋伝』との関係において展開される著者の論述には興味深いものがある。

呉晗の著作の訳者であり、親交のあった著者であれば、文化大革命による批判以後の呉晗およびその家族の運命に対する思いやりには、想像以上のものがあろう。その著者も、時に呉晗に鋭い批判の目をむける。それは呉晗の政治に対する認識の甘さについてである。

困難にたえて学問の途に進み、清華大学の教師になり、さらに解放区に入って毛沢東の知遇を得、解放後、北京市副市長という要職につくという呉晗の人生の上昇の時期と、歴史劇に託して毛沢東の政策を批判しようとし、文化大革命の嵐の中にまきこまれ失脚していった時期とには、何か共通したものがあるような気がしてならない。それは学問の政治への依存、知識人の政治家への依存といってよいかもしれない。

ところで、著者の中国の民衆にむける目は厳しい。その時々の政治権力に、ただ従うだけの民衆しかいないかのようである。それは文化大革命によって、中国が長期間にわたって時を浪費しただけでなく、数多くの貴重な人材を失ったことへの痛恨の思いの反映でもあろう。これまでの近代中国の民衆に関する研究は、その客観的な存在のあり方を考慮することが少なかったように思う。様々の形態の運動の中における民衆と同時に、日常的な民衆の存在の状態という側面からも、丹念な研究の成果を蓄積することによって、中国近代史の各段階における民衆像がつかめるはずである。その作業を通じて、現代中国の民衆についての理解も得られるはずである。

第三章では、文化大革命、「実権派」批判との関連で、毛沢東の社会主義社会の下における「階級」認識を分析する。著者は、毛沢東が社会主義社会における「階級」の復活の可能性という問題を提起したことを評価しつつも、毛沢東の「階級」認識が経済的諸関係に基づくものではなく、恣意的に、無制限に適用されるものであったことを批判する。経済的に困難な状態の中で、彭徳懐の毛沢東批判に典型的にあらわれたように、国民経済の建てなおしをめぐって、指導者層内で厳しい論争が展開されることになるが、著者によれば、毛沢東がこのような「階級」認識に基づき、本来「人民内部の矛盾」として処理すべき問題を、「階級」矛盾の激化として飛躍させるようになるのは、この時期からである。

第五章で、著者は、戦後の旧植民地研究の中で、台湾を対象にしたものが少ないことを批判しつつ、台湾における民族運動の展開過

程をさぐろうとする。その場合、著者は主要に二つの点に注意をむける。一つは運動そのものの展開過程である。そこには、比較的に社会の上層部を指導者とする台湾文化協会による、改良的で、台湾の自治・独立をもとめる傾向の強い民族運動から、大衆的な基盤を有し、中国革命と密接に関係した運動への転換が見られる。こうした運動の転換をもたらした契機について、著者は二つのことを考えているようである。一つは日本帝国主義と台湾農民との矛盾の激化——具体的には甘蔗栽培をめぐる——である。もう一つは青年層への中国革命の進展の影響である。

運動の展開と密接な関係があるが、著者が注意をむけるもう一つの問題は、「中国改造論争」といわれるものである。それは台湾文化協会内における指導者達と、青年層を中心にした革新的な部分との、中国社会の現状認識と変革の途をめぐる論争である。運動において改良的な立場にたつ前者は、中国社会の現状を「封建社会」ととらえ、追求すべき変革の方向を、ブルジョア階級の指導による資本主義発展の途においた。これに対して後者は、中国の封建社会は帝国主義によって崩壊させられており、現在の中国社会は帝国主義支配下における特殊な「半植民地社会」だとし、そこから中国の資本主義発展の可能性を否定し、社会主義への途を提起した。

この「論争」を通じて、台湾文化協会の分裂が明確になり、改良的な立場にたつ人々が指導権を喪失していった事実だけでなく、それが有名な「中国社会史論戦」の始まる四年前に展開していたこと、また社会史論戦には見られなかった「半植民地社会」という社会規定の提起があったことにも、著者は注目している。

なおこのほかに、著者は、第四章では一人の「愛国者」、「民族主義者」である学者が、朴政権下の韓国においていかなる状態におかれたかを明らかにし、それとともに、日本の政治家や知識人が正しく韓国の実状をとらえるように訴える。最後に、「附録」として、戦前の中国で様々な活動に従事し、また中国の動向を注視してきた三人の人に対するインタビューを収録している。

（一九七九年一二月刊、勁草書房、二八九頁、二、二〇〇円）